

# 世界で活躍する 「インド人」たち

## 大国化で変化する在外者の地位

海外の「インド人」が注目を集めている。鉄鋼王ラクシュミ・ミツタル、ノーベル文学賞のナイポール、ハリウッド監督のM・ナイト・シヤラン、ゴルフアールのヴィジャイ・シン……。10年ほど前なら、この特集にこの項目はなかったかもしれない。インドでも「外国人になった人たち」と冷やかに扱われていた。それがグローバル化やインドの政治



米サンフランシスコ郊外リヴァモアのヒンドゥー教寺院。本国の職人が手がけた本格南インド様式。ごく普通の新興住宅地区にあって異彩を放つが、ロサンゼルス近郊のマリブ寺院のように、ハリウッド・セレブの帰依を受け観光地化した場所も  
写真提供：筆者（以下も同じ）

経済面での大国化を受けて海外のインド人が本国とリンクして認識され、その活躍がナシヨナリスティックに「誇るべき同胞」と高く（ときに過剰に）評価されるようになった。

### 在外インド人の多様な姿

インド国外に住むインド出身者、あるいはインドに祖先の出自を持つ人たちは、インド系移民、在外イン

ド人、非居住インド人、印僑、インディアン・ディアスポラなど、さまざまな名で呼ばれている。その形態も一様ではない。

①英領インドの時代に労働力として他の英領植民地に渡り、定着した人たちの子孫。

②インド独立以後、学歴や技術を持つて主に先進国に就職、定着した人たち。その子孫。

③海外で就労するが定着しない人たち。中東や東南アジアへの出稼ぎが知られている。

①は移住先でインド系というエスニック集団を形成している。祖先が農業労働者など単純労働力として移住した地域では、現状のインド系も社会的、経済的に恵まれた地位にあるとは言えない。脚光を浴びる在外インド人の多くは②に属している。アメリカ、カナダなど移民受け入れ制度の整った国に、歓迎される人材として定着している。③の出稼ぎは、同じ現代の現象でも能力、経済力、移住先での立場など、先進国を目指す専門職の人たちとは対極にある。



せきぐち まり●横浜生まれ。立教大学大学院文学研究科博士前期課程修了。南アジア近現代史専攻。亜細亜大学ほか非常勤講師。共著に『ワールド・カルチャーガイド インド』『インドのことが3時間でマンガでわかる本』『移民から市民へ 世界のインド系コミュニティ』などがある。  
homepage3.nifty.com/~mariamma



〈上右〉イングランド北部のリーズで開催されたインド、南アジア系のイベント「リーズ・メーラー（祭）」のポスター。リーズ、ブラッドフォード、マンチェスターなどにはインドやパキスタンかと錯覚するほど人口が集中した地区がある

〈上左〉カナダ・バンクーバーのシク教寺院。中興の祖グル・ゴーヴィンド・シンの記念祭に集まった信徒たち。記念年の間、グルの遺品が世界中のシク寺院を巡回していた



ITの集積地シリコンバレーのショッピングセンターにある、8つのスクリーンを持つインド映画専門シネコン。最新のインド映画がインドとほぼ同時に封切られるほか、ムンバイやチェンナイのスターがしばしば来訪する

### 歴史や社会を反映する評価

しかし、今日でも脚光を浴びているインド人IT技術者は、専門職だが定着する傾向は薄い。また学者や文化人などでは、インド国内と海外に複数の拠点を持つて活動する例も多い。豊かになったインドへと還流する動きもあり、海外、在外と単純に言い切れない「グローバルなインド人」とも呼ぶべき状況が加速している。

し、インドでも在外者を表わす言葉として認知されつつある。印僑の「僑」には「よそ者」の意が、「ディアスポラ」には「故国喪失」というニュアンスがある。何世代も現地に定着してきた人たちが、母国インドと在外者が強く結びつく現代には馴染まない言葉だと思おう。ここでは細かく検討する余裕はないが、在外インド人の実状や立場は多様である。ビジネスの成功者やエンジニアが脚光を浴びがちだが、それはほんの一端に過ぎない。

在外インド人の総数は、移民統計やエスニシティ別の人口調査の基準が各国で異なることから、正確な数値を求めることは困難だが、現状で2000万人ほどとしているものが多い。

インドの大国化で、移住先で「インドらしさ」を個性やプライドとして積極的に保持する傾向も強まっている。移住先でインド人が互いを「デーシー（ヒンディー語でお国の人の意）」と呼ぶのが、インド系コミュニティの名称として現地に定着

インド政府は、NRI（非居住インド人、Non Resident Indians）やPIO（先祖の出自がインドにある人 Person of Indian Origin）という公的なステータスを設定し、在外者を国民並みに優遇して、投資など豊かな在外者からの経済効果と呼び込もうとしている。

在外インド人は、故国とつながる



←シカゴのデヴォン通りにはブロックごとにさまざまなエスニックの商店が集中する。インド地区（別名パテル・ナガル）にはインド・センターがあり、互助活動や文化行事を主催。写真は地元住民向け異文化体験イベント

↓女性宇宙飛行士のカルパナー・チャウラー。2003年、スペースシャトル・コロンビア号に搭乗。大気圏突入時の空中分解事故で亡くなった

写真提供：NASA

↓ルイジアナ州選出の下院議員ボビー・ジンダル。1971年生まれという若さも魅力。07年10月のルイジアナ州知事選挙にも意欲を示している

写真提供：U.S. Congress

個人の文化的遺産や係累を持つ一方で、現在の場所で受容され生きていくという現実がある。その姿をインド、移住した土地、歴史など違った視点から見ると、同じ生き様に対して、異なった評価がなされていることに気づく。それは、インドや海外のインド人たちが経てきた歴史や社会の転変を象徴しているとも言えるだろう。

## 評価のゆれるセレブたち

最後に、幾人かの在外「著名人」に、評価のゆれの事例を見てみる。

2003年、スペースシャトル事故に散った女性宇宙飛行士のカルパナー・チャウラーは、今やインドの英雄となり、少女たちに科学や宇宙への夢を抱かせている。しかし1990年代の最初のシャトル搭乗は、インドでほとんど話題にならなかった。米国籍になっていた彼女は「外国人」だったのだ。また彼女のインドの実家は保守的で、外国の大学に進み米国人と結婚し国籍を捨てた娘を、最後まで手放しで評価することができなかつたらしい。

イギリス生まれのインド系俳優で作家のミーラー・スイヤルは、若くして英国MBE勲章を受けた実力派。人気コメディ番組や大作ミュージカルの出演、制作で英国はもちろん世界的にも認知度は高い。しかし英国のインド系は中下層のイメージが強いいためか、彼女はインドであまり紹介されず、評価も極端に低い印象がある。

アメリカ共和党の政治家で、ルイ

ジアナ州知事に落選したが04年に下院議員となったボビー・ジンダル。この二つの挑戦と快挙は当時のインドを沸かせた。しかし、米国のインド人たちの彼への評価は複雑だ。インド系政治家がワシントンに到達したことは誇るべきである。しかし彼は保守的なキリスト教派に改宗し、白人の妻を持ち、インド系の非常に少ない土地を地盤にするというように、インド的なものを払拭している。彼の成功は自己実現だが、マイノリティ政策などインド系のための声となる政治家ではない、というものであった。

最近の若者向けハリウッド映画で主役を張るインド系2世俳優のカル・ペン、出演作が「おバカ映画」であるためか、インドではほとんど無視されている。しかし、全米のティーンエイジャーの絶大な支持を背景に、現在おそらく最も有名な「インド系アメリカ人」だ。大企業トップやIT長者などではなく、誰にも受け入れられるアメリカ人の姿の中に「インド」の個性を維持する彼は、新しい世代のグローバルなインド人の一例かもしれない。